

アジア工芸教育交換プログラム研究

The Study on Craft Education in Asia with Exchange Programme

城崎	英明	KIZAKI Hideaki (研究メンバー代表)
大谷	正幸	OHTANI Masayuki
河崎	圭吾	KAWASAKI Keigo
鈴木	康雄	SUZUKI Yasuo
鏑	隆弘	TSUBA Takahiro
中村	有希	NAKAMURA Yuki
林	泰史	HAYASHI Yasushi
宮永	春香	MIYANAGA Haruka

はじめに

日本の高等教育における新たな時代のモノづくりのあり方について指針を求め、平成21年度より5年間に渡りアジアの伝統的なモノづくりの現況と、先端的IT環境の整備状況およびそれらを反映したデザイン教育について調査を行ってきた。研究調査の一環として、先方を訪れるだけでなく、先方のつくり手や研究者を日本へ招き、産地を含むこちらのモノづくりの現状を見てもらいながら意見交換を行うことにより、環境とモノづくりの関係についての相互理解を深め、研究を進めることができた。また周辺活動として、アジア工芸研修員制度によるモノづくりの将来的な担い手である若手教員や若手作家の来学は、モノと技術を通じた交流機会となり、このプログラムにとって大きな支援となった。このプログラムと研修員制度を通して関わった国々はミャンマーを中心に、韓国、台湾、カンボジア、ブータン、マレーシア、ラオスの7カ国にわたる。

研究の最終年にあたる平成25年度は6回のミーティングを行い、座談会形式で交わされた意見をもとに、新たな時代のモノづくりのあり方について、それぞれの研究メンバーが考えをまとめることとした。以下にそれらを示すものである。

ミャンマーとの関わりから

二十年余り東南アジアと関わってきて、今振り返るとミャンマーに一つの縮図を観たように感じる。つ



[写真1]

まり、多くの国々が類似した近代化の流れを辿って来ているが、ミャンマーに関しては、ちょうどタイミング良くその激動の時期に立ち会えたと言える。

嘗てビルマ（現ミャンマー）は経済的に非常に繁栄し、精神性豊かな文化が育まれていた。首都ラングーン（現ヤンゴン）にはヨーロッパスタイルの立派なビルが立ち並び、東南アジアの経済・交通の要所として存在した。しかしその後、半世紀に及ぶ軍政の時代には、ほとんど鎖国状態となり、後発開発途上国、アジア最貧国とまで言われるほど、全てが疲弊し衰退した。しかしここ数年で少しずつ民主化が進み、グローバル経済にのみこまれるように急激な変化が起こっている。

ミャンマーと関わり始めた当初は、軍政が全てを支配しており、国民は抑圧されていた。しかし皮肉にも、一方では貧しさ故に前時代的なものづくりが残されていた。国土の中央部、ドライゾーンは綿花の産地で、手引きで糸が紡がれ手織りされていた。北部の森林地域では、カジノ木の樹皮を灰汁で煮て、木槌でたたき、紙漉きが行われていた。それら手仕事を中心とする多様な生業が存在し、先進国の近代的な技術を知る事すら困難であった。染色においても、僻地では化学染料の入手が難しく、天然染料が多用されていた。ある意味そこには近代化した国々が失った多くの伝統的な技術が存在していた。

そんなミャンマーも、近年は近代的なビジネスのノウハウや、機械化が急激に進みつつあり、嘗てのものづくりの技術が急激に失われつつある。タイ、ベトナム、ラオス、カンボジアと、一足早く近代化してきた国々では、あらためてものづくりの良さや重要性が認識され始め、工芸的なものづくりが国際的なマーケットでビジネスとして成立する事に気づき、それら工芸的なものづくりを、保護継承する活動が盛んになりつつある。

一方日本に眼を向けると、江戸時代の鎖国状態の中で、ものづくりの技術は最高レベルに達していた。明治維新から近代化の流れが始まり、太平洋戦争を経て、急激な近代化からマスプロダクトの時代を築いた。この激動の時代、多くの伝統的なものづくりの

技術が失われた。しかしながら、手づくりの伝統は細々と継承され、今日も壊滅は免れているかに観える。

経済至上主義の今日、手づくりは効率が悪く、大きな利益を生み出し難い。しかしながら細々とでも続いている理由はどこにあるのか？工業化、ハイテクノロジーの頂点にある自動車。人々が求めるその内装は、手作業で削り出される木製のダッシュボードであったり、手作業で縫製される皮張りシートであったりする。つまり、真に豊かな空間、豊かな精神性を求めようとすると、高品質の手づくりのテイストに勝るものは無く、工業製品からは得難いのかもしれない。

現代から近未来のものづくりについて考えをめぐらせると、ハイテクノロジーな工業技術と同時に、手づくりの技術を継承する事の重要性が観えてくる。最新の技術で豊かになる部分、それはある意味利便性であり、時間の短縮であるかもしれない。しかし、それにより自由な時間を多く得ているとも言えない状況があり、どこに精神的な豊かさや潤いを求めるのか？それは時間効率が悪く、手間暇が必要な手づくりの逸品が生み出す、潤いの空間や人の五感に伝わる優しさでないだろうか？

（きざき・ひであき 工芸／染織・繊維材料）

「ものづくり」と歴史の転換点

アジア工芸教育交換プログラムに携わりながら考えずにいられなかったことは、日本経済の停滞とアジアの後発国の隆盛のコントラストであり、また、産業化と手仕事の経済面での二律背反である。このプログラムに先立って、ミャンマーはサウンダーの染織学校を拠点とした研究活動に取り組んでいたとき¹、その地は軍事政権が支配する最貧国に数え上げられていたが、それから10年ほどの月日が流れて、日本経済の低迷とは対照的に、ミャンマーは世界中の企業が東南アジアの「ラスト・フロンティア」として注目する投資対象国に挙げられるようになっていく。²「ラスト・フロンティア」という言葉が、投

資を誘うための常套句として用いられていることは言うまでもないが、国際情勢を慮るならば、それは文字通りの「ラスト」であり、このことは工芸教育についても深い示唆を与えているように思われる。

そもそも20世紀後半からかまびすしく叫ばれたグローバル経済とは、「安く仕入れて高く売る」という経済の営みを世界規模で競う、鞘取り競争にほかならない。このグローバル化の波に飲み込まれて、世界中の製造業ができる限り人件費を抑制できる生産拠点を探し回ることを余儀なくされた。それを私たちは「空洞化」と呼んできたわけだが、早々に経済成長を遂げて高度な社会インフラや社会保障制度を抱えた先進国では、それらの維持管理コストがあらゆるモノやサービスの価格に組み込まれなければならないために、後発国よりも明らかに不利な価格競争を強いられるようになったわけである。このような経済環境はまた日本の伝統的な「ものづくり」をも蝕んでいった。たとえば、輪島市の漆器生産額はピークとなった1991年の18億円から2012年の4億3千万円へ、また、漆器関連の従業者数はピークとなった1990年の2893名から2012年の1394名へと大幅に減少している。³ なおも抗うことができないグローバル化の趨勢が日本経済と日本の伝統的な「ものづくり」の先行きに暗い影を落としている。

だが、ミャンマーが「ラスト・フロンティア」と謳われる状況は、グローバル経済の鞘取り競争がよいよ終盤に突入したことを仄めかしている。「ものづくり」についても、勝算の見込めないグローバル経済への参入よりもグローバル化が終焉した先のことを展望すべき頃合いであろう。

実際のところ、第42代アメリカ大統領ビル・クリントン氏は既に2006年の講演の中で、「21世紀の世界の基調はグローバル化ではない」と明言していたが⁴、その理由の一つに石油資源の生産が頭打ちになっていることを挙げている。そして、エネルギー問題の啓蒙活動において世界的に高名なりチャード・ハインバーグ氏は彼の著書『Peak Everything: Waking Up to the Century of Decline』(New Society Publishers, 2007、邦訳未刊)の中に”(post-) Hydro-

carbon Aesthetics”と題する章を設けて、エネルギー供給量が増大していた局面でのデザイン史を振り返った上で、石油資源が枯渇に向かう時代の「ものづくり」と美意識について論じている。彼は、日本の民藝運動についても言及しつつ、近未来の「ものづくり」のあり方がかつてのArts&Crafts運動の特徴を備えるようになることを予言している。同様に、未来社会を展望するために京都大学が立ち上げた縮小社会研究会には、民藝協団理事の西堀寛厚氏が参加しているが、西堀氏は予見される縮小社会のあり様に柳宗悦氏の民芸に関する思想が馴染むことを指摘している。⁵

私たちは歴史の転換点に立っている。あらゆる分野において、潤沢な化石燃料を前提として経済成長していた頃の方法論は通用しなくなる。来るべき時代を予見した上で、時代に相応しい「ものづくり」のあり方についての確たる信念を築くことが求められているように思われる。

(おおたに・まさゆき 一般教育等／電気化学・文明論)

金沢美大の今後の展望 ーアジアのデザイン教育及び産学官の 動向調査から学んだことー

はじめに

アジア工芸教育交換プログラムの活動に参加し、韓国ソウルに2011年3月に国民大学校、ソウル大学



【写真2】

校、弘益大学校、江南デザイン支援センター、ソウル・デザイン・マーケティング支援センター、サムソンデザイン学校 (SADI) を訪問。台湾に2012年3月に国立交通大学、台湾芸術大学、Taiwan Design Centerを訪問。マレーシアに2013年2月にUiTM・Malaysia Design Development Centre・MARA College of Art and Designを訪問致しました。これらの訪問と国内の大学の調査を踏まえて本学の今後の展望について記述する。

デジタル工作機械工房と技官の必要性

3Dスキャナー、3Dプリンター、レーザーカッター、3D切削加工機のようにデジタルデータを使用する機材は、創造の幅を広げてくれる。また、製品や作品の試作にも便利。これは金沢市民が仕事や趣味で活用したい設備となる。公開講座を行えば人気の出る分野と考える。問題は、工房の運用費と専任技官の存在。現在、各専攻で教員が工房の管理を行っているが、それらは全てアナログ機材で教員が作品に応じて作り方の技術指導を行う為である。デジタル工作機械は教員の技術が不要なため、専用のデータ管理と運用管理が行える人材が必要。管理者はプロのモデラーをモデル制作会社から採用、または、助手の増員による運用が考えられる。運用費に関しては、大学の授業と平行して国内外からモデル制作の受注を行い運用資金を補う。デジタル工作機械工房は授業は勿論、地域連携、産学連携PJ、美大グッズ制作等に有効と考える。

有料公開講座による助手の増員

有料公開講座を助手を中心に開講することにより、金沢市民や地元企業との交流を深める事が出来る。また、大学側としては、助手を多く抱えることで、教員の負担が減り、研究に時間が割ける。また、助手の収入の面での自立が可能となる。特にレーザーカッターや3Dプリンターの管理運用や、3D-CG教育など、現状の人材不足には有効と考える。公開講座を行っている公立美術・芸術大学では、東京藝術大学が有料で本格的に行っている。その他で

は、愛知芸術大学は「愛知県立芸術大学」という名称で公開講座を行い、京都造形芸術大学は「藝術学舎」という名称で公開講座を行っている。沖縄県立芸術大学は「ワークショップ・公開講座」(学部・専攻主催)と「文化講座／公開講座・移動大学」(付属研究所主催)の2種類がある。静岡文化芸術大学は公開講座と公開工房の2種類行っている。

OB & OGの活用

地元に住むOG & OBに本学での工房やコンピュータ室の使用許可を与え、代わりに色々なノウハウを学生が学べる環境は、お互いにメリットがあると考ええる。

ポートフォリオデータのアーカイブ化

在学中のポートフォリオデータをサーバーにて一括管理し、社会人になってからの作品データも全て本学で管理する。データは、卒業生の紹介資料や後輩の教育資料として活用。

講演会の記録と製本機の設置

本学の講演会の存在をもっと市民の方にとって頂き、気軽に参加頂ける環境(駐車場の確保)が必要。講演会は全て動画のライブラリーをつくり図書館等で視聴出来る環境があると便利。講演会やワークショップを行った後に直ぐに製本されて配布される製本機があると便利。製本機は、他大学の論文等の印刷も有料で行い、運用費をまかなう。

知的財産の管理と運用

社会連携、産学連携やその他授業で発生したアイデアに対して「特許権」、「意匠権」、「商標権」を取得し管理運用する事は、教員及び学生の知的財産を守ると同時に、実績となり、大学のブランドイメージ向上に繋がる。

専門性を深める為に他大学の授業を単位化

自分の専門分野を深める為に、他分野の勉強を行うコトは有効、具体的には、美術系の学生が経済学

を学ぶコトは、とても重要。

展示空間の充実

校内に色々とレイアウトが変えられる実験的な展示用空間があると便利。授業は基本全て展示にて公開することで、作品と授業のクオリティーを向上出来る。

食堂の充実

毎日行ふ食事とその空間は大学関係者の健康維持にとっても重要。食堂は、市民と大学関係者全員から愛される存在になる必要がある。イメージとしてはタニタ食堂のように、美味しく、ヘルシーで、食べ応えまで計算された食堂。出来れば、食器も大学で制作した器や、柳宗理デザインのカトラリーを使い、日常生活レベルを上げることも重要。また、その器やカトラリーが気に入れば購入することも出来るようになるとなお良い。夜はバーとして経営することで、より深いコミュニケーションを促進出来る。

柳宗理記念デザイン研究所の併設

世界的に有名な柳宗理と本学の関係を知って頂くため、また管理運用するうえでも大学に併設する事は重要。デザイン観光スポットの1つになる。

平成百工比照の併設

世界的に有名な日本の工芸の世界。その魅力を深く知ることが出来る平成百工比照の併設は、工芸の街金沢と金沢美術工芸大学のブランドイメージ向上に繋がる。

金沢美術工芸大学美術館を併設

製品デザイン科が所有する世界の有名な椅子の展示など、学生が気軽に良いモノを目にすることが出来る場としての美術館開設の意義は大きい。

マテリアル展示室の併設

世界中から集められた先端素材を一覧できるコトは、デザインとアートにはとても重要。東京に開設

されたMaterial ConneXion Tokyoのメンバーになり、素材情報と素材サンプルを閲覧出来る空間を作る。

街中の空き家を大学寮として有効活用

国際交流を進める上で大学寮の存在は不可欠。短期、長期共に海外からの研修生やお客さんに滞在して頂く際に、現在は保証人や生活道具の準備を有志に委ねていることは問題。

制服／作業服のデザイン

繊維産業が盛んな金沢市の影響でデザイン科にファッションデザインコースが設立されました。そのファッション科をアピールすることは重要。大学関係者の制服／作業服をより快適な服装になるようファッション科でデザインし、着用して頂くことで金沢美術工芸大学のファッション科の存在のアピールと本校のブランドイメージ強化に繋がる。

所感

国の財政赤字、超超高齢化社会、少子化による国力低下、エネルギー問題、原発問題と問題山積みの中金沢美大は今後どう変わって行くべきか重要な岐路にたたされている。大切な事は現状を良く分析して先を見越して出来る所から改善を始めて行く事。キーワードは「日本も、金沢市も金沢美大も如何に魅力的に小さくなれるか？」だと考える。本校の移転に関しても、この視点で取り組めば良いものとなるであろう。

(かわさき・けいご 製品デザイン／家電製品)

地域と文化に根ざしたものづくり

調査で訪れた台湾のデザイン専門学校で顕著に見受けられた日本文化への強いリスペクトは、本研究の中でもとりわけ印象に残った。今後も日本がアジアの興味を牽引していけるだけの魅力を発信し続けることは可能であると思えるが、日本のポップカルチャーやサブカルチャーが何を持って形成され、独

自性を維持できるかは、まだ我々自身が理解できていないように思える。驚いたのは彼らの作品レベルの高さで、多くの学生は美術系の専門高校や画塾などに通ってから専門学校を目指したわけではなく、2年そこそこでこれほどまでにレベルをあげる秘密は専門学校での教育システムにあるのか、それまでに培われた学校教育や文化にあるのか、解明できないままに終わったのは心残りである。しかし台湾に限らずアジアイングリッシュを使いこなすアジア諸国のクリエイターが、アジア、オセアニアを中心とした英語圏をボーダーレスに活躍の場としている現状を見ることができた。ある意味ガラパゴス化したことで注目を集める日本の文化と、国境を越えボーダーレスに活躍するアジアのクリエイターというまったく異なった様相を見ることができた。



[写真3]

マレーシアの街を歩くと女性の民族衣装が日常的に着用され、若いも若きもその時の流行を反映した衣装を新調しては楽しんでいることを知った。毎シーズンごとのファッションショーでは新作が発表され、その時々トレンドが存在するというのも、日本の和装文化に慣れた感覚にとっては、とても新鮮な驚きである。翻って我々日本人にとっての民族衣装である和服はあまりに日常性からほど遠く、冠婚葬祭を別にすると一部の伝統文化である茶道、華道や舞踊などに関わる人や発表などのタイミングを除いて、日常のシーンで目にするのはまず無くなっている。衣服というよりある意味コスチュームに近い存在になっているように感じられる。

あるとき染織業の関係者と話す機会があり、いわゆる「着物離れ」を嘆かれていたが、では関係者の中に日常的に和服を着ている方はどれほどおられるか聞いたところ、それはまずないと答えられた。こと金沢において業界関係者が率先して和装を日常的に楽しむ文化が浸透すれば、この街の風景も大いに変わるであろうことに期待を込め、提案してみたことがある。

工芸が文化財としてその位置や価値を高め、保存や継承に手厚い扱いを受けることや、アートの素材としての価値を高めることも、一つの発展かもしれないが、日常性や親しみやすさ、多くの人の生活からは遠い存在になってしまったことは、日本における工芸の特殊性かもしれない。「生活工芸」を提唱するガラス作家、辻和美氏の視点はアジアに位置する日本におけるものづくりのあり方に一つの視点を与えてくれている。都市化やインフラの発展、自家用車や家電製品など、モノやそれを所有するということが豊かさを象徴していた時代が終り、人の意識は安全や継続性、循環といったより高度な充足感を求めるようになってきている兆しはアジア全体を通して感じられた。

今回の研究ではアジアをとりまくものづくりと教育環境を俯瞰的にとらえることができた。これからの世界をとりまく状況のなかで、アジアに向けてものづくりという視点で先鞭をつけることが大学の責務であることを考えるとき、大きくは二つのポイントが見えてくる。一つは教育を通して繊細で洗練された美意識や精緻なシステム構築力を日本のクリエイティブが持つ独自性としてとらえ、同時に欧米の後追いから脱却し、グローバルの流れに追随しない強い人材の育成を目指すこと。アジアはもとより世界の中で活躍できる人材を育てることが、本学に限らず日本の高等教育機関に求められる使命ではないだろうか。もう一つはアジアにおける文化のターミナルに位置するともいえる日本ならではの地理的、歴史的な視座を持って、ものづくりのハブとしての役割を果たしていくべき立場にあるといえる。また近代化という面でも経済的にも一歩先んじた視点を

活かして、グローバル化に飲み込まれ、ともすると失われていく文化の復興やアーカイブを進める責任を担っていることも重要な役割ではないだろうか。

北陸新幹線開通を来春に控えた金沢では、町屋が加速的に壊され、県外資本によるビル建設やテナントの出店が勢いを増している。アジア諸国でも同様に文化を守り発信するバランスを失い魅力が崩壊する様を見てきた。この外的要因による局所的バブルがはじけた後、金沢でもこれまで守ってきた魅力を維持する力量が試されているように感じる。同様に大学の本質に立脚した活動に専念することの重要性を再認識している。

(すずき・やすお 視覚デザイン／映像、写真)

ものづくりと生物多様性

アジア工芸教育交換プログラムの活動において、東南アジアのものづくりの現場と人を知る機会に恵まれた。工業化やグローバル化の影響を強く受ける地域では、先進国のもので追うことが主眼となり、地域自身が育ててきた伝統的なものは、ものづくりの技術も含め、地域特性を示す文化財としての扱いとなってしまう。手作業を中心とする伝統的なものづくりは、原材料の調達場所や生活スタイルとして地域の自然環境との結びつきが強いものであるが、文化財としての扱いとされている現状では、その結びつきは弱まるばかりである。

近年、社会の様々な分野で文化多様性、生物多様性の重要性が語られるようになってきている。ユネスコでは、2001年に文化の多様性を人類共通の遺産として、「文化の多様性に関するユネスコ世界宣言」を総会で採択し、その重要性を発信している。これは経済を初め様々な分野でグローバル化により地域間の交流が進むことで、伝統的に時間をかけて育まれてきたそれぞれの地域の固有性が薄くなっていくことを危惧しているものである。多様性が少なく均一化が進んだ社会では、新たなものは生まれにくい。多様に異なるものが出会う際に新たな価値の創造が

あり、文化多様性を保全してゆくことが将来に亘って価値を創造することを担保するものである。また、ある地域の文化はその地域の生態系に対する人間の関わり方の形態であることから、文化多様性は生物多様性と密接に関わりを持っているといえる。ものづくりは文化の一形態であり、その原材料を地域の生態系が持つ資源や、生態系を維持する環境の資源に頼っている。生物多様性と切り離して考えることはできない。文化多様性、生物多様性の保全が求められる中、これからのものづくりのあり方について考えてみたい。

リーマンショック以降、ニューノーマルという価値観が広まっているといわれている。阿部淳一氏（三菱総合研究所）によれば、日本におけるニューノーマルと、それまでの価値観であるオールドノーマルは、次のように整理することができる。⁶

ニューノーマル

- ・安全、安心志向
- ・絆志向
- ・バブル崩壊、リーマンショック、3.11東日本大震災という多くの人にとってネガティブな出来事を経て日本人の中に育ってきた
- ・サービスや商品を購入することで人との結びつきが生まれる「つながり消費」
- ・使用することに価値を見いだす

オールドノーマル

- ・「成長が是」を標榜
- ・自己強化
- ・権力志向
- ・流行のブランド品や限定品を持ち、人と違うことに価値を見いだす「自分消費」
- ・所有することに価値を見いだす

加えて阿部氏は、ニューノーマルが顕在化する中で、52%、1.5年、39%という数字が、古い価値観の元に進められてきた商品づくりと、この新たな価値観による消費のギャップを見せていると指摘している。「52%」は、発売から2年以内に消えるヒット商

品の割合である。1990年代までは、この割合は8%であった。「1.5年」は新しい商品が利益を得られることのできる期間である。長い開発期間を経て世に出したものは、すぐに類似商品が作られ、利益を得ることが難しくなる。開発者は非常に短いサイクルで新製品を生み出さねばならない厳しい状況に置かれている。「39%」は震災前の仕事の満足度で、明らかに高いものではない。今はもっと低いと思われる。人々の好みが多様化していることも大きな影響があると思えるが、商品自体も作り手も短命化していることが顕著である。同じ時間と資源を使っても、昔のように皆で分配できるほどの十分な利益を創り出せていない状況にある。

この様子は人間が森を伐り開いた後に見られる植生の様子に例えることができる。植生遷移の段階のひとつとして、森が伐り開かれた後の裸地には草本の植生が広がる。この遷移の初期段階に広がる草本は、比較的速いスピードで成長し、種子を沢山作って広範囲にばらまくことにより、自種の優占を図る種類が多い。この性質を持つ多様な草本種が繁茂することで、そこにはこれらの草本を餌とする昆虫などが移ってくることになる。この段階での生物多様性の度合いは、多くの種数が見られることから、裸地の状態に比べると大変高いものとなっている。これら草本が広がる様子を同じような広さに生育する寿命の長い樹林と比べてみる。草本植生は背丈において大きくならず、また寿命は短い、速い成長と種子を多量に作る点にエネルギーを掛けている。樹林を形成する樹木は成長が遅いが、しっかりした根や幹などその場所で長く生育することに有利な形態にエネルギーを掛けている。両者に対照的なものがみえる。植生遷移においては、一定の時間と広さの単位において得られるエネルギーが同じであると、草原から樹林に置き換わってゆく。樹林の方がその場所で得られるエネルギーを貯め込んでいるといえる。また、草原のように生活形が似ている多くのものが競争を中心とした関係に有るのに対し、高さの異なる樹木から草本までが異なる明るさや湿度の中において生育しやすい環境の中でそれぞれが生

育している。時としてお互いが相手にとって生育しやすい環境を創り出しているような状況も見られる。近年のものを取り巻く様子は、草原に似ている。種数が多く多様性は高いが、作ることや使うことによる蓄積も少なく、同じことを続けると資源も作り手も失われてしまう。草原に薄く貯められたエネルギーを使って、回復するまもなく、採取し続けると土もやせ、全くの裸地になってしまうような様相を見せている。ものを作って売る社会において、植生遷移のように草原に長く生きられる樹木が侵入くることを期待したい。

ものづくりを取り巻く環境として、資源を提供する生物多様性が高いこと、文化多様性が高いことが望ましいことは明らかである。多様で異なるものが出会う際に新たな関係が生まれる機会が多くなる。ただ、文化多様性にも生物多様性にも単に種類が多いだけでは将来につながらない。多くの種類がその場に有るものをそれぞれの都合で使い尽くす形ではなく、多様な種が出会い、生まれる新たな関係が伝統やエネルギーなど何らかの価値を蓄積できるものでないと次につながらない。伝統は多くの人々の目による審査というフィルターを通した洗練である。長い時間を掛け多くの人の知恵の蓄積がある。一時の流行に蓄積は無く、また求められてもいない。樹林の中では、大きな樹木が倒れて光の入るギャップができると、種子として林床の落葉の中に眠っていたものが一斉に育ち始め、周囲と併せて多様な様相を見せる。木質というエネルギーに加え、多くの植物種を貯め込んでいる。蓄積のある多様性を持っているといえる。樹林の外ではこのような様相は期待できない。ものづくりの姿勢としては、次世代に伝えることを前提とすれば、ある程度の蓄積のある文化やある程度のエネルギーの蓄積のある生態系を見極め、それらから得られる資源を使いながらも、さらに次への蓄積となる形を生み出してゆくことの重要性を認識する必要がある。東南アジアは地球上でもっとも多くの太陽エネルギーが集積し、その風土は変化に富む地形と相まって多様な文化を産み出してきている。これらの蓄積のある地域環境で、生

態系と文化のこれまでの蓄積に配慮しながらものづくりを実践すること、つまり生態系から得られる様々なサービスを楽しむ際に、同時に生態系が回復する時間を文化の大事な一側面として丁寧に扱う姿勢が重要であり、その環境においてこそ次世代につながる新たな価値を産み出す真のイノベーションが生まれると考える。

(つば・たかひろ 環境デザイン／ランドスケープアーキテクチャ)

日本とミャンマーにおける漆工芸交流の可能性について — 工芸教育の現場からものづくりにおける“考え方”を交流する —

2013年8月19日～9月1日にかけて、ミャンマーにおける漆工芸の現状を知る機会を得た。アジア工芸教育交換プログラムの一環として行われている交流活動に参加し、8月23日、バガン漆芸技術大学(Lacquerware Technology College)にて漆に関するワークショップとレクチャーを行った。今回はその中で見えてきた、ミャンマーにおける漆工芸の現状をふまえ、今後の日本とミャンマーにおける漆工芸交流の可能性について述べていきたい。

漆芸技術大学ではこれまでにミャンマー伝統工芸学術支援事業による取り組みでワークショップ等が開催されており、日本の漆工芸教育、デザイン、技術向上などの観点から日本との交流活動の取り組みがなされている。

筆者は民主化始まりの時期に二度(2010、2013)訪れる機会があり、わずか4年の間ではなるが以下の変化が工芸教育の現場において見られると感じた。①伝統的なデザイン以外への意欲的な取り組みの拡大②漆工芸における作家という意識の拡大。以上の2点と研修での活動をふまえて考察する。

レクチャー・ワークショップでの取り組み

2013年8月23日、学生、教員、漆器工房関係者を

対象にレクチャー・ワークショップに取り組んだ。これまでに日本の漆工芸における歴史や技法などの紹介が行われてきたことを踏まえ、まだあまり触れていない日本人と漆の精神性について紹介するプログラムを実施した。

レクチャー：縄文時代における日本の漆工芸と精神性

縄文時代を中心に日本の漆器を取り上げ、縄文時代の赤漆に対する日本人の精神性を中心に漆器出土品画像を交えながら紹介した。また、芸術という視点から漆の精神性をコンセプトにしているアート作品も一例として紹介した。漆とアートという概念自体があまりないとのことであったが、素材が持つ特徴一つ一つにも意味があり、人の精神性に関わり、使われているという素材自体の話に関心を持ってもらうことができた。

ワークショップ1：日本の赤漆を体験する

日本の漆芸で用いられる赤色顔料2色(王冠朱：赤口、黄口)を中国産漆(朱合呂色、木地呂色、箔下)と混ぜ合わせ、精製の違いで生じる漆の透過性や発色の差を観察したり、日本の漆刷毛で塗るというワークショップを行った。ミャンマー産漆(チチオール)が3種類あるのに対し、日本、中国産漆(ウルシオール)が1種類なのにもかかわらず、精製方法の微妙な違いによって、漆を使い分けていることに高い関心が寄せられた。漆の樹液そのものの成り立ちや、精製の仕方、ミャンマー漆を日本の漆に近づけることができるのかどうか、といった質問が上がった。

ワークショップ2：コクソ漆による素地の可能性

粘土のように形作ることのできるコクソ漆(漆、餅粉、麻綿、木粉を混合したものを使用)の制作実習を行った。ミャンマーにもタヨー(Thayo：漆に牛の骨や分などの灰を混ぜ、練り合わせた粘土状の漆)という類似した技法があるため、漆技法による自由な造形を展開する可能性を探った。

今後の日本とミャンマーにおける漆工芸交流の可能性について

今回の交流で強く感じたことは、クオリティーの高い技法、材料を獲得し、ミャンマーの漆工芸をさらに展開していきたいといった意識の強さと、一方でどのようにしていけば良いのかといった具体的な方向性が明確には確立していない点があげられた。冒頭にあげた2点から、今後のミャンマーと日本との工芸教育交流の可能性について述べる。

①伝統的なデザイン以外への挑戦に対して、具体的な着地点が必要ではないかと考える。現在の日本における漆器産業の取り組みとしてデザイナーとのコラボレーションにより、新たなデザインの漆器づくりが行われていることを紹介し、ミャンマー人デザイナーや他の産業などの外部との関わり合いを具体的に展開することで新たなミャンマー漆工芸の可能性が展開できるのではないだろうか。また、大学の課題において、漆器づくり＋市場展開の模擬授業など、社会との連携授業が可能となれば、作り手と使い手の橋渡しに関わることのできる人材育成にも繋がることが考えられる。

②生活工芸における作家という意識の拡大においては、特に大学教員の方との交流で強く感じた。バガンでは砂絵という土産物が売られている。パヤー（仏塔）の土壁を削り描いていることを売りにしていた例をあげ、土地の素材を使うこと自体も作品のコンセプト、価値に繋がるという話に反響があった。漆器づくりでもコストを安くする為、科学塗料などを見えない下地部分に使い作られている漆器もあり、見えない部分をどのように扱うか思案するという。その土地で作る意味を外側のデザインだけでなく、内側にも意識を込めて制作していることを伝えたいといった思いがあること、そのことを知ってもらった上で扱いや価格で差別化を行う必要があるといった話が聞かれた。今後、ミャンマー漆芸作家という立ち位置で活動する人が増えてくる可能性を感じ、またそういった意識のある作家を国外にも紹介できる交流方法を検討する必要があるだろう。

いずれにしても、長期計画で交流課題に取り組む

必要があると感じる一方で、街中や人々の話からミャンマーをとりまく社会情勢は急速に変化するだろうことを体感させられた。漆工芸に限らず、伝統的な工芸は現代社会への逆行的な行為のようにも思われるが、歴史によって培われた技術、素材の中には、現代の大量消費とは違う、価値を見いだせる可能性があると考えている。歴史が培ってきた部分と今ある価値観を照らし合わせながら、その時代のものづくりを提唱していく必要があり、漆工芸においては、漆の歴史がある諸外国も含め、お互いを知ること＋これからのものづくりの“考え方”についても交換できるような交流を目指したい。

（なかむら・ゆき 工芸/漆芸）

プログラムを顧みて

人々の生活様式の違いや歴史の流れを背景に、文化によって必要な実用性と社会の中での美的価値は刻々と変化し、ものづくりの中にはつくられた文化と時代が色濃くあらわれる。

現代社会において、人々の生活様式は大きく変化し、社会的な格差が広がっている。世界規模で社会全体の生活様式を見ると、最先端の科学技術の恩恵を受け、環境問題を意識したり、クラウドを活用したりといった生活を送る一部の人々がいる。その反面、紛争や食糧難、疫病などにより生活の保障のない、生活様式を確立することができない人々が多数いる。地球温暖化などの環境の変化や大手資本企業による工場の進出により、各地域の生態系は変化し、生産人口が量産企業に偏ったり流出したりすることで、いままで脈々と築かれてきた各地域の文化・伝統の継承は年々難しくなっている。特に、大手資本企業による人件費削減を目的とした海外工場での大量生産は、その生産品の規格が世界基準、万人向けであるが故に、現地の環境・文化・伝統を無視したものになりがちである。また、20世紀は石油エネルギーの時代であり、大量生産、工業化を中心とした一部の工業先進国の利潤のための時代であっ

た。21世紀となった今、この時代の流れには疑問がもたれている。

現在、国際社会においては、持続可能な開発・発展を促進するため、地球的な視野をもつことが必要とされ、一人ひとりが、世界の人々や将来世代、環境との関係性の中で生きていることを認識し、行動を変革する事が求められている。ものづくりにおいても、新たな時代のあり方を模索し、地球的規模に立った持続可能な開発・発展を視野に入れた生活様式の確立に向けて取り組む必要があると考えている。そのために私たちは、ユネスコの提唱するESD (Education for Sustainable Development) をふまえてアジア全域の新たなネットワークを構築することで、アジアのものづくりのファシリテーターとなり、最先端の技術と地域の文化・伝統を結びつける役割を果たしていきたいと考えてきた。

振り返ると、1990年代より東南アジアの伝統的なものづくりに関する調査研究を実施すると共に、現地の人々との交流を推進してきた。とりわけ2009年からの「アジア工芸教育交換プログラム」においては、東南アジア各国の研究者・技術者を金沢に招聘して、ワークショップ等を開催し、また、各地へと研究者を派遣して、相互交流を深めてきた。ものづくりを通じてアジアの国々と交流し、地球的規模に立った視野から新たな構想の確立に取り組んできた。

これらの研究活動に取り組む中で、私たちはアジア全域での技術的ネットワークと人的ネットワークの構築の必要性に気付いた。技術的ネットワークの

構築は、伝統的なものづくりの理念の確認が足がりとなる。アジア各産地に赴き、古来行われてきた天然資源の扱いや自然とのかかわりを調査し、消滅しかけている高度な技術や素材の扱いを保護、記録し、それらを環境破壊への警鐘や無形文化財として伝わる知見の共有につなげ、時代に則した新たなものづくりの価値観の創出に結びつけようと考えた。次に、産地間の背景や技術の違いについて比較検討するとともに、製品や原材料の収集・分析を行い、その成果を資料化した。技術的ネットワークにおける、価値観と蓄積された資料の共有は、地域の資源活用効率化を可能にするだけでなく、共通の美意識や精神性の再確認およびアジア圏独自の知的財産の確立につながっている。このような技術的ネットワークづくりを円滑に進めるためには、人的ネットワークづくりが不可欠である。各産地で得た調査結果について研究の成果や提案と合わせて現地の人々に還元し、信頼関係を築くことが人的ネットワークづくりである。この関係をもとに、よりいっそうの情報共有など相互交流を深め、人材育成や連携体制の強化を図っていった。

技術的ネットワークと人的ネットワークという2つのネットワークは、互いに深く関わりながら進化、成長するスパイラルの関係にある。そして、このスパイラルは、調査やその成果をデータ化することによって得られた価値観や意識を先端技術に融合させ、その応用を目指すことができる。このことによる相乗効果こそが、21世紀におけるものづくりの在り方の大きな解決の糸口になるのではないだろうか。

アジア全域の技術的ネットワークと人的ネットワークを構築し進化、成長することは、地球的規模に立った持続可能な開発・発展を視野に入れた生活様式を確立し、新しい価値観を生み出すことにつながる。それは、時代や人々の生活様式の中で必要な最先端の実用性のある技術と、地域の文化・伝統に基づいた美的価値を結びつけることでもある。

(はやし・やすし 工芸／金工(鑄金)、立体造形)



[写真4]

註

- 1 城崎英明、鰐 隆弘、鈴木康雄、大谷正幸「ミャンマー伝統工芸調査研究事業：SAUNDERS' MUSEUM設立の軌跡」金沢美術工芸大学紀要49、2005、pp.7-15
- 2 「ミャンマー その投資ブームは本物か」<http://diamond.jp/category/s-myanmar> 2014年7月28日アクセス
- 3 平成25年版 輪島市統計書 http://www.city.wajima.ishikawa.jp/docs/2013112100016/file_contents/09kougyou.pdf 2014年7/14アクセス
- 4 Transcript of Clinton's Speech Now Available <http://www.altweeklies.com/aan/transcript-of-clintons-speech-now-available/Article?oid=166649> 2014年7/29アクセス
- 5 西堀寛厚、「日本の民芸」平成二十五年十二月号、10-11頁
- 6 <https://dl19w3jlhkm4w.cloudfront.net/2012/j-money+Winter2012.pdf> Sep.2, 2014閲覧

参考文献

里山資本主義 日本経済は「安心の原理」で動く
藻谷浩介 日本放送協会 角川書店
自然はそんなにヤワじゃない 誤解だらけの生態系
花里孝幸 著 新潮社
ミャンマーにおける漆工芸を通じた工芸教育交流
ーミャンマー伝統工芸学術支援事業の活動現場からー
松島さくら子 宇都宮大学教育学部紀要
第1部 58, 181-191頁 (2008)

写真資料

- [写真1] 木槌でカジノキの繊維を叩く、シャン州の紙漉き
撮影：城崎 英明
[写真2] 台湾、国立交通大学
[写真3] マレーシアデザインセンター 撮影：鈴木 康雄
[写真4] ミャンマー・タンバワディー地区の鋳物工房
撮影：林 泰史

(2014年10月31日 受理)